

文化財担当者柴田常恵の記録 - 大場磐雄との関係性を軸に -

山内 利秋(吉備国際大学社会学部専任講師)

はじめに - 柴田常恵について -

大場磐雄に関わるこのプロジェクトに関係していて、大場が写真という画像資料を活用する根本になった部分には何が存在するのだろうか？この問題に関して、特に実際に資料を整理していくさまざまな段階において、柴田常恵という人物についてきちんと考えていかないと解決できないのでは、と考えるようになりました。

現在、國學院大學には柴田常恵関連の調査資料類が所蔵されておりますが、これは大場先生自身が國學院大學におられた時に購入したものです。この資料類には、柴田が東大時代から調査したさまざまな写真、フィールドノート、拓本、メモ、草稿等が存在します。

この資料をもとにして、柴田常恵という人物を色々追求していくうちに、いくつか重要なことが分かってまいりました。今日はこの点について若干触れていければ、と思います。

まず、最も多い誤解をここで解いておきたいのですが、柴田常恵については、一般に「しばた じょうけい」と通称で読まれており、現在ではあたかもそれが本名のように思われてしまっているようですが、正確には「しばた じょうえ」です。柴田を紹介した文章の英文には"Jo-kei Shibata"とまで書かれていることも実際にありますが、これは大きな間違いです。「しばた じょうえ」と読んで下さい。

柴田に関しては、よくいわれているのが、明治時代の後期から昭和20年代にかけて活躍した、現在では既に学史上の考古学者として認識されていることが多いのではないかと思います。また、大場先生が築地書館の『日本考古学選集 柴田常恵集』で述べられていますが、「学史上特筆すべき研究があったという訳でもない」とまでいわれております。しかしながら、この考え方は柴田の評価というのを非常に過小化していると思います。むしろ、柴田は研究者としてよりも、近代文化財保護行政を屋台骨として支えてきた人物、特に大正から昭和前期にかかる、実質的な国家の文化財保護担当者として、政策の一端を担ってきたと位置付けた方が妥当ではないかと思います。また、大場磐雄も柴田から研究活動ないしは文化財保護に関わる色々な知見や情報を得ている、ということがあった様です。

2. 東大時代の調査と写真資料

柴田は明治10(1877)年に名古屋で生まれ、真宗東京中学高等科、私立郁文館中学の史学館を出て台湾総督府で講師をやっていた時に坪井正五郎の講演を聴き、考古学に非常に興味を持ったみたいです。恐らく自分のほうからアプローチしたのだとは思いますが、結局坪井正五郎の方から東大に来ないか、ということで、理学部の人類学教室の方に行き、採用されたということになっております。この時は副手程度の肩書きだったようです。それが明治35(1902)年のことです。その後正式に助手として採用されています(明治39(1906)年)。

初期の文化財保護行政においては、特に埋蔵文化財に関しては東京大学と帝室博物館の2つが調査を行ない、各地から出土した遺物に関してもそれぞれが収集するというシステムがありました。これは坪井正五郎と三宅米吉との間で取り決められて、いわゆる先史考古学の分野は東大理学部人類学教室、歴史考古学系、特に古墳時代以降のものに関しては帝室博物館がそれぞれ担ったというところがありました。

このような事情から - もちろん学術的な重要性も勘案されておりますが - 、柴田は坪井の命を受け

て、日本各地の色々な所を調査をしております。その中で取り上げたいのが富山県の氷見大境洞穴、また、朝日貝塚の調査です。

朝日貝塚は、日本で最初期の頃に竪穴住居跡が確認された遺跡として学史上位置付けられています。その時の調査写真です(写真1)。また竪穴住居論をこの住居跡をベースにして柴田や大場が後々展開していった上で、非常に重要な遺跡として認識されていました。これはイルカですね(写真2)。

住居跡の検出状況を俯瞰で撮影した結構著名な写真です(写真3)。『石器時代の住居址』という本を柴田と大場 - 当時は谷川磐雄の名前でしたけれども - の共著という形で雄山閣から出しておりますが、その際にも使われている写真です。

同じ様に、大境洞穴ですね(写真4)。先日、富山県氷見市立博物館でこの特別展をやりました(大野編2002)。氷見の図書館の方にこの時の立面図が出てきたということで。麻生優先生がそのことで昔、洞窟遺跡研究会かな。5年位前まで千葉大の方でやっていた研究会ですけども。それの方でもやっておりました。これもその時の調査写真ですけども、鬚を生やしている方が小金井良精ですね。これが柴田が調査しているところの写真です。ここでは一部しか挙げておりませんが、これ以外にセクションを綺麗に検出しているところとか、プランを出しているところとかあります。

昭和42(1967)年に平凡社から出された『日本の洞穴遺跡』という本がありますが、その中で有名な、大正7(1918)年に地元の新聞『高岡新報』にも掲載された、同誌主筆の井上江花が出土してまとめられた人骨を確認している写真があります。この時の写真は人骨の隣に大型の石棒、三叉も持っている大型の石棒が立っています。一般的な認識では、その写真を見ると「あっ、石棒はこんな所にたっていたのかな」と思うんですけども。どうもそうではなくて、ずいぶん前から氷見洞穴で個人によって採集されていた石棒をそこに持ってきて一緒に写したようです。この点は東大所蔵の写真で確認しました。

大場はこの写真を昭和42(1967)年に平凡社から出版された『日本の洞穴遺跡』中の論文「日本における洞穴遺跡研究史」の中に使っています。大場の論文中には柴田のコレクションの写真がしばしば使用されています。中には大場の文字で「出版社に貸した」と書いてあって、それきり返って来ない写真もあります。

大境洞穴の調査で重要な点は、洞穴が実際に人類に活用されていたということを初めて確認されている。それ以前に大山柏なんかが『史前学雑誌』等で洞穴居住をヨーロッパの事例として述べていますが、大境は日本で初めて確認された事例であります。それと、竪穴住居の確認ですね。これは大場の研究に随分影響しています。特に大場磐雄は - ご承知の通り - 初期は先史考古学を専門にしておりましたから、初期の大場の研究に大きく影響している。

柴田との共著『石器時代の住居址』または『史前学雑誌』の中に書いた「上代の洞窟遺跡」の中で、この柴田の調査について触れています。

柴田はその後、東京大学の調査で、特に所謂「南洋」、ミクロネシア地域への調査を実施しております。大正3(1914)年に第一次大戦が勃発すると同時に、日本の帝国海軍は南洋諸島 - 当時でいう「南洋」という言葉ですけども - 今のミクロネシア地域に進出して、ドイツが領有していたマリアナ・カロリン・マーシャル諸島を占領しております。

柴田は、東京大学では政策の一端として - 初期の人類学調査はそうでしたから - フィールドワークを実施しています。その時に長谷部言人と松村瞭と共に柴田がその調査に参加しています。特に松村とは行動を共にする機会が多かったです。先程の氷見洞穴でも、人骨がごろごろ出てきたら松村はすぐ電報を打って応援を頼んだりしておりますね。この時の写真は東京大学総合研究博物館から『ミク

『ロネシア古写真資料カタログ』として出されております。この解説は、今大阪の国立民族学博物館にいらっしゃいます印東道子先生が書かれております。

実際の調査は大正4(1915)年の3月から5月の間に横須賀から海軍の加賀山丸に載って、チューク(トラック島) - フィジー - マーシャル - ポーンベ(ボナベ) - コシャエから再びチュークに戻って。長谷部言人はここで帰りましたが、その後も松村と共に新ミクロネシアへ回り、ヤップ島 - パラオ - チューク - サイパンをまわって小笠原に1回立ち寄ってから横須賀に戻っています。

柴田が、これに関する写真を沢山撮っています。実は國學院大學の方で柴田に関するプリントを沢山持っておりますが、東京大学総合研究博物館の方では乾板があるんですね。この乾板は元々理学部の人類学教室の旧蔵資料として、ずっと保管されていたものです。それが赤沢威先生の時代に博物館の方に移動したと。それで徐々にカタログとして今出していっていると。前に鳥居龍蔵の写真が随分話題になって、博物館で特別展を2回位やっております。その写真はよく見ると、では全部柴田が撮った写真と同じなのかということでもないみたいですね。東大時代は勿論、柴田が写真を撮ったやつをプリントとして個人コレクションにして持っているんでしょうけれども。その中でも東大の方に含まれている写真と含まれていない写真というのがあるみたいです。

例えばこれはコロールの首長達です(写真5)。フェフェン島の男性 - 耳を穿孔して肥大化しています - (写真6)。これは結構色々なところで使われていて、一度東大の企画展示でポスターにもなった写真だそうです。これはカロリン系の親子です(写真7)。右の男性の右足が象皮病で腫れているというのが分かっているそうです。

キリスト教の教化を受けてしまっている様な島とまだそれが及んでいない様な島がはっきりと分かれているということが柴田や長谷部、ないしは松村の論文の中に書かれており、写真をもて確かにもそうした傾向があるようです。柴田はこの時の調査について「南洋占領地視察談」という論文を『人類学雑誌』の中に書いておまして。これは人類学会の例会で講演したものを活字におこしたものです。

次に、パラオの建造物(写真8)。集会場とか個人住宅として存在したものです。屋根の妻簷の破風の部分に面白い絵が描かれています。または次のように小型なんですけれどね(写真9)。これはちょっと分からなかったんですけども、遺構みたいな感じですね(写真10)。石が組まれている様なやつ。これはちょっと分かりません。あとは面白いのは、海で船に乗って島に近付いていく様子を幾つも写真に撮っているんですね。段々島が見えてきた(写真11)。近付いてきた。最後に、島民が船に乗ってやってきたところ(写真12)。あるいは港に着いたところかもしれませんが。おそらくこの写真の右端に写っているのは、柴田らが乗船していた日本郵船の加賀山丸の船体だと思います。

柴田は、その時のフィールドノートを残しております。『南洋記』という風に題されて大学ノートに残っています。これは貴重な本、重要なデータだという風に認識しております。というのはその時 - 大正4(1915)年当時 - の調査情報としては、柴田・松村・長谷部によって幾つか論文が出されていますけれども、柴田は1編しか書いていないんですね。この『南洋記』には松村や長谷部が行なった、例えば人類学的な計測のデータとかも全部ここに書いてあります。非常に細かい詳細なものです。恐らく出版する可能性を考えていたようですが、何らかの事情で出来なかったのではなかったかと考えています。

『南洋記』に先程の島が幾つかスケッチされています。こんなのが書かれています。椰子油を入れて使用するカンテラです(写真13)。既に柴田の頃には石油ランプが用いられていたことは柴田が論文の中に書いています。よくよく見ると縄文後期末から晩期の初頭位に東北から関東にあった様な手燭

土器みたいな形をしています。これは島民みたいですけども。ちょっとキャプションが無いので、どういった状況なのかは分かりません。ただ、当時の居住の様子というのがよく分かるんじゃないかな、という風に考えています。

この『南洋記』というのが - 今ちょっと色々読んでいるところで。まだ内容についてはじっくりと読んでいないんですけども - 非常に面白いのは、例えば写真のこと。どこどこでどういう写真を撮ったか、そういうことが書いてあると同時に、例えば横須賀から船を出す時に松村が港の波止場に写真機を置きっぱなしにしてしまったと。急いでそれを取った、という様なことも書いてあります。もし松村が写真機を置きっぱなしにしたら、この写真はなかったんじゃないか、ということも分かります。非常に面白い資料です。

印東道子先生は大正4年の調査の写真の多くは長谷部と松村が撮った。それは長谷部と松村の論文に多く使われているからだ、ということを知っています。ただどうもこれを見ると、柴田も随分の数撮影していたんじゃないか、という風に考えております。

3. 内務省から文部省時代の調査

さて、その後柴田は東大から異動することになります。戦前の文化財保護行政は明治期に古社寺保存法が出来てから、社寺行政の一環として実施されてきた経緯があります。その中で文部省と内務省の方でそれぞれ管轄が分かれております。文部省の方は古社寺保存法に関わる業務をやっていた。一方で大正8(1919)年に史蹟名勝記念物保存法が施行され、これが内務省の管轄になりました。内務省地理課において行政事務が開始されたのに伴い、柴田が東大からそちらにシフトしたということです。この時、調査囑託・史蹟考査官という名前になっておりますが、実際は現在でいう行政の文化財保護担当者、文化庁の文化財部の記念物課の調査官あたりのポストだったんじゃないかな、という風に考えております。まあこういう経緯です。

最初は内務省の方でやっていましたが、昭和2(1927)年に文部省へ事務移管されて、異動します。宗教局の囑託という形で業務を行うことになりました。

こういった様な業務にあたったことから、柴田は「指定」に関わる業務を行なう為に、日本各地の文化財調査 - これは勿論埋蔵文化財に限らず - を実施しています。調査を実施するにあたって83冊に及ぶ多数のフィールドノート - 野帳 - を残しています。それで、例えば仏像の法量であるとか、色々な銘であるとかを書いております。同時に沢山の写真資料を残しておりました。各地域の写真を撮っております。

写真を記録する時に、例えば中尊寺の写真は『中尊寺大観』『中尊寺総鑑』という写真集に纏まっておりますが、この時は大塚巧芸社を使って、カメラマンを恐らく東京から連れて行ったみたいですが。その一方で、各地域にいた、写真館等を経営していたカメラマン - 「写真師」から営業「写真家」という名前に変わった頃ですけども - を使っていたようです。

岩手県岩手郡玉山村渋民 - 「渋民村は恋しかり」で有名な、石川啄木のふるさとです - の常光寺にある仏像の写真です。詳しい事は分かりませんが、ここで非常に面白かったのは、画面の左下にちょっとサインが入っているんですね。写真14です。写真15はサイン部分を拡大したものです。左下の所に「T.KARA」と書いてあります。何かな、と思ったら「唐 たけし」という、戦前から昭和40年代位まで活躍していたリアリズムの写真家、芸術系の写真家として有名な方だった、という事実が分かりました。これは東京都写真美術館の金子隆一さんと岡塚章子さんのご指摘です。

どうも柴田は、地域にいた写真家を沢山使っていた様な形跡があるんですね。これもそうですね(写

真 16)。正面と背面という風に、きちんと資料写真としての撮り方で撮らせています。唐たけしがこういう資料写真を撮ったという事例は、写真史の専門家の方でも非常に珍しがっておりました。

文化財調査を実施するにあたって、その記録化という行為に関して自らが詳細なフィールドワークを実施していたと同時に、例えばさっきの大塚巧芸社みたいに立派な写真集を作る一方で、普通の調査に関しては地域の専門写真家を使っていたという風に、成果物をどう出すかによって写真家を使い分けているんですね。あともう一つは当然といえば当然ですけども、柴田が自分自身で撮っています。その時は写真としての質は写真家に比べたら落ちるものもありますが、ある程度、どういう風な成果を出すかによって写真家を使い分けているかということを考えさせます。

このような構図というのはよくよく考えたら、現在の文化財の記録化ないしは活用に関わってくる様な基本的なワークフローを柴田がある程度確立していたという可能性を想定させます。そういった行為は、ある程度文化財写真の専門性が高い写真家を柴田が各地域で育成しようとしていたんじゃないか、という風に考えられます。

柴田は『渥美郡史』とか『埼玉県史』という市町村史・県史を編纂しましたが、一方で埼玉郷土会を発足させたりして、地域史を推進させています。それによって、これは初期の文化財保護行政によって柴田一人では勿論出来ない訳ですから、地域の研究をどんどん推進していたということがわかります。そして文化財の色々な保護システムを戦前において確立していこうじゃないか、という考え方があったのではないかなど。また、写真をどうするかという点で、写真家を地域で使うというのもその中の一環で考えていたんじゃないか、という風に私は考えております。

4．大場磐雄と柴田常恵

さて、大場磐雄は柴田に関してどういう風に考えているかという話ですが、大場は柴田と同時期に内務省の神社局の考証課に勤務していました。そのことから柴田と色々関係が出来ていたようです。その後、大場の言葉でいうと「外弟子的な関係」という風になっています。

大場磐雄は築地書館の『日本考古学選集 12』の中で「学史上における柴田常恵の業績」という文章を書いております。その中の一節。「全体に地味で学界を驚かしたという論著は少ないけれども、私たち考古学を学ぶものにとっては忘れることの出来ない数多くの示唆や御指導を受けた。私は大正末年頃からの所謂外弟子の一人であって、少ない私の学問の師の一人として今でも尊敬の念に変わりはない。」「氏の学問は、その中心が考古学にあったことは疑を容れることは出来ないが、その学問的領域の広さから見ると、他の同時代の学者とやや異なっているといつてよいであろう。博学多識という語はまさに氏を指しているかと思う。私たちがしばしば疑問をもつと「まず柴田先生へ聞こう」というのが当時の常識であり、氏はまたこうした後輩の疑問に対して諄々(しゅんじゅん)とたのしそくに解説されたのであった。」という風な文章を書いております。

こういった文章を始め、先述しました『石器時代住居址』を柴田と共著で出し、更には大場の洞穴・岩陰遺跡研究に柴田の影響というのがものすごくくっきりと反映されている点、そして何といつても柴田の調査資料を大場が國學院大学の勤務時代に大学の方に購入させているということを考えてみると、大場が柴田から研究活動の面でかなり影響を受けていたことを改めて理解できるのではないかと、いう風に考えております。

参考文献

大野究編『特別展 大境洞窟をさぐる』氷見市立博物館、平成 14 (2002) 年



写真1 (sj0138)



写真2 (sj0150)



写真3 (sj0168)



写真4 (sj0187)



写真5 (sj-np-0048)

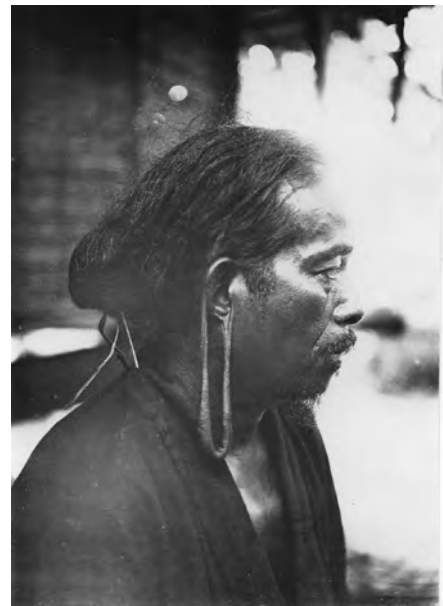


写真6 (sj-np-0045)



写真7 (sj-np-0003)



写真8 (sj-np-0030)



写真9 (sj-np-0031)



写真10(sj-np-0024)



写真11(sj-np-0015)



写真12(sj-np-0016)



写真 13(sj-np-0017)



写真 14(sj0471)



写真 15(sj0471の部分拡大)



写真 16(sj0472)

写真出典

全て柴田常恵写真資料(國學院大學所蔵)より

(内は『柴田常恵写真資料目録』(國學院大學日本文化研究所 2003年)による整理番号
但し、南洋の写真については目録未刊行につき仮番号('sj-np」のもの)を掲載